FRAUMÜNSTER – PREDIGTEN

フラウミュンスター説教

ニクラウス・ペーター牧師

２０１３年3月１７日

説教シリーズ『力』第四回

権力と奉仕

ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

マルコによる福音書１０章３５－４５節（新共同訳）

親愛なる共同体の皆さん

「力」―聖書本文の光のうちに真摯に受け止め、省みたものとしての力―を主題とし、「教会という権力」や教会内の力について批判的によく考えてみたい、という意図に立って始まった説教シリーズも半ばに差し掛かっています。ここにきて、この主題は、ベネディクト一六世の辞職という目下焦眉の問題に直面させられています。すなわち、わたしたちの姉妹教会であるカトリック教会の最重要の権力ポストの補充―〔つまり、〕教皇選挙―を伴う問題です。プロテスタントの人間としては、その「選挙制」〔のあり方〕について、距離を置いた批判的な立場でしかコメントすることができないでしょう―透明性がゼロで、前任者ないし前々任者に選ばれた枢機卿たちだけに投票が可能、しかも、みな男性ばかりなんて（！）―。また、人々のもとで、コミュニケーションや透明性を外に締め出し破門〔エクスコミュニケート〕してしまったのか、と思われるほどに、互いの不信感が大きいことを観察せざるをえません。しかし、そういった諸問題にもかかわらず、その〔選挙〕結果については、喜びをもって次のように受け止められています。たぶん、本当に聖霊が現臨しておられたのだろう、と。というのも、驚くべきことに、また、喜ばしいことに、選ばれたのは、一人のラテンアメリカの神学者だったのです―といっても、今日のカトリックのクリスチャンの大多数は、南米に住んでいるのですが―。それにしても、また印象深かったのは、このホルヘ・マリオ・ベルゴリオという人が、フランチェスコという名前をもって、権力と富の放棄をただ説くだけでなく、自ら感銘深いあり方でそのとおりに生きた、かのアッシジのフランチェスコの伝統に立っている、ということです。その簡素さと、最初に窓べに現れたときの誠実な様子（それに飾り気のなさ、これまでも既に枢機卿としてそのように生きてきたのでしょう）、そして何より、自分のために祈ってほしいというその求めは、実際、感じのよいものでした。一方で、軍事政権期の彼の態度へは、批判的な声もまた、上がっています―それが誹謗中傷の類かどうか、誰が判断できるでしょうか―。しかし、歴史上のペトロも、雄鶏

が鳴いたとき、やはり決定的な立場にあったのに、結局そのときは、キリストを否認してしまいました。なぜなら、彼もひとりの人間だったから、そして、大胆な勇気が欠けていたからです…。それにしても、彼は、それから後、原始キリスト教会の大胆で、特別な、良い範となりました。

もし、わたしたちがプロテスタントとして―よりふさわしくは、福音主義〔福音的〕キリスト者として―力についてよく考えてみようと思うのなら、ローマではなく、まずは一度聖書の福音に目をむけましょう。すると、そこでは、とても感慨深いほど開かれたあり方で、力について―〔すなわち〕権力を請う弟子たちの問題と、それ自体で力を持つイエスの答えについて―言明がなされています。この歴史が物語るところには、いくらか、ローマのコンクラーヴェに先立つミニ・コンクラーヴェの様相があります。そして、この小さな神喜劇〔*divina commedia*『神曲』（ダンテ）のパロディ〕の主人公は、ここではペトロではなく、ヤコブとヨハネという二人の兄弟です。彼らはイエスに内密に近づき、天の玉座の間でイエスの右と左の両脇に座すことに、承諾を求めます。全く、子供じみた考えです。いや、天の玉座、これについては、実際子供っぽいとは申しません。幼稚なのはしかし、彼らの望みです―えらくなりたい！権力に難なく達し、王様の右と左に座りたい、だなんて（！）―。

福音的であるのは、こういった歴史が秘匿されるのではなく、むしろ、伝承されているということです。他の弟子たちをとても怒らせたこれらのばつの悪い事件が、あたかも「内輪だけの〔直訳：家の中での〕」ことのようにとどめおかれ、隠蔽されてしまうのではなく、物語られていくのです。そうして、人間はみなそうであること、誰もが権力への求めを持っていることが知られていきます。ここでのように、「力を得るために」力に取り入ることがなされるとき、それがいかに問題なのかということを思わされますが、それと同じほどに、これがいかに人間くさいことなのかということをも、知らされるのです。イエスは、彼らを頭ごなしに叱ることはなさらず、むしろ、穏やかに応じておられます。「**あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか**」。

イエスは、キリスト者の共同体に大事なことは何なのか、よい意味で力は何のためにあるのかと、語りかけておられます。力は、責任と大胆さをもって、そしてまた犠牲の用意をもって行使されなければならない。「杯」とは、その使信が抵抗や憎悪につき当たるとき、それが暴力をもって応じられるに至るとき、苦難の杯・困難な道のりを象徴するものだ―まさにそのようにイエスご自身が、これから身をもって体験し、苦しみを味わい尽くすことになるように。それをイエスはご存知の上で、ここにほのめかしておられます―。「洗礼」とは、しかし、神が条件を、すなわち、成就という条件を持ち出しておられることを象徴するものである。洗礼は、神と共に新しく始めることができるということを意味します。いわばそれは、それぞれの人生におけるイースターの出来事。そこで、イエスは言われるのです。受難の用意があること、そして、その成就を神御一人が与えたもうと知っていること―これが、「力」には欠かせないのだ、と。

さて、二人は答えます、むとんじゃくに。「知っていますとも、できますとも…」。そして今や、他の弟子たちが「苦りきって腹を立て〔sauer〕」ることになります（チューリヒ聖書はいくらかおとなしく、unwillig「不機嫌に」と訳していますが…）。対して、イエスはすべての弟子たちに、決定的に、直接に語りかけます。「**あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい**」。

これは大いなる言葉です。力は、抑圧隠蔽をもって果たされるべきものではなく、むしろ、仕えることをもって果たされなければならない―力を持つ者は、あらゆる人々に対して特別な責任を持つのだ―。わたしたちも知るところでは、これと全く同じことが、健全な企業経営〔マネージメント〕理論にも言われています（経営の実際ではあまりにもしばしば違ったように見えるものではありますが…）。力とは、どのような課題が片付かずに残っているのか、どこに摩擦が生

じているのか、どこで決断が必要となるのかについて、導くことができる、分析することができるという意味である。力とは、的確に決断し、分担協力すべきことを把握し、分かちあいながらコミュニケーションする大胆さを持つことである。ここでさらに、イエスは、一歩先を行かれます。力は、仕えることの中に、共通の責務にあたる奉仕において、現れるべきものである。しかも、しばしばそれは、決して簡単ではない奉仕である、と。そのため、イエスはそこで、さらに犠牲の用意というあの基本要素を強調なさるのです。「**人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである**」。

「多くの人の身代〔贖い〕金」―これが意味するところはこうです。ここで問題となっているのは解放であり、ここで大事となってくるのはそれに用意のあることである。すなわち、良くない危険な諸力からのこの解放に責任を負い〔einstehen〕、そうすることで、もし摩擦や争いが生じた〔entstehen〕としても、そこに立ち続ける〔sich hinstehen〕用意である。すなわち、教会という領域における、良き力のしるし、これが、奉仕〔仕えるということ〕なのである。

〔ここで〕わたしたちは、批判的になり、あるいは自己批判的になるでしょうか。まさにかくいう諸教会において、そして、キリスト教界においても、言葉を裏返してみればそこに謙遜も、慎み深さも、本当の奉仕の心構えも何もないような奉仕者願望やしもべ意識があるということ、あまりにも多くそのまま、ぴったり当てはまるのではないでしょうか。実際そうです、政治に関わる聖職者のポストにまで、信じられないほどの奉仕者たちが入りたがっては、「上位の奉仕者」になれたらいちばんいいのだが…などと欲しているのです。

これらの〔イエスの〕言葉の核心を、再びキリスト教に、最も精力的かつ最も過激に、しかしまた最も説得的に思い起こさせた人、それが、アッシジのフランチェスコでした。この人の回心は、ひとつの夢にさかのぼります。そこで彼がつぶさに悟ったのは、神をまことに主としこの方に仕えるとは何を意味するのか、ということ、そして、この奉仕が、世の常の力とはまた別の性格を持つものでなければならない、ということでした。そこで、彼は、教皇に忠義を尽くす騎士たちの、〔ホーエン〕シュタウフェン家に対する闘争を、これ以上支持しない、ということを決断します。というのも、彼は、内に響く声を聞いたのです。「お前はなぜ、主でなくしもべに仕えるのか？」その後、彼は、公の法廷と自分の父親の前で、自らその家のあらゆる特権を完全に脱ぎ棄てて関係を絶ってしまいます。あらゆる富、あらゆる法的権限、そして、その富裕な家に結びついていたあらゆる権力を放棄したのです。彼は、裸になりました。彼が生まれたときのように、そして、人間だれもが生まれるときにそうであるように。彼は、自分の相続を劇的に棄て去ったのです。それは、キリストの責務を果たす本当の仕え人・奉仕者となるためでした。

さて、今日なお、このフランチェスコの熱情は影響を残しています。この徹底的な、神秘的に愛に担われた衝動、象徴的かつ実質的な力の放棄！しかし、彼は単純に無目的だったのではありません。そうではなく、〔全ては〕教会を変革するため―もろもろの良き力に、チャンスを与えるため―だったのです。ここに、宗教改革が引き継いだものがあります。宗教改革は、司祭の階級制度の象徴的意味を批判し、しかし、その象徴性からある強調点を、次のような諸組織構造に置き換えることによって、それを果たしました。〔つまり、〕わたしたちの教会における力関係の透明化、〔透明な〕選挙制度、投票による有職者解任の可能性、人々の分担協力という構造に、です。そう、女性に開かれた牧師職にまで。そのしるしは継続されています。いや、それは現実となったのです…。

ですから、もし、フランチェスコという名を負うひとりの教皇が職に就き、その名に相応しくあろうとするのであれば、それはひとつの希望のしるしです。ナザレのイエスの御名と御霊にかくも結びついていたかのフランチェスコの自由な使信の力を、再び生き生きとしたものとさせるチャンスです。そうであれば、カトリック教会がどのような展開を見せるのか、わたしたちとしても無関心ではおれないでしょう。そしてわたしたち自身分かっているとおり、わたしたちもまた、改革派として、フランチェスコのこの力強い、神秘的な衝動を、わたしたち自身のためにも、

わたしたちの独自の改革のために必要なものとし、真剣に受け止めることもすべきでしょう。
　なんという印象深い歴史〔物語〕でしょうか、イエスの時代のイスラエルという国におけるこの秘密のミニ・コンクラーヴェのお話〔出来事〕は。そして、対するイエスの応答はなんと印象深く、教えに富んでいることでしょう。以下、最後に、四点に要約してみたいと思います。

１．力は、それ自体よこしまでも悪くもなく、人間性に従属するものである。なぜなら、具体化を願い、生命を望み、共同体を形成することは、つねに、力を伴って進行するものだからである。そしてそれは、教会においてもそうである。
２．力は、しかし、仕えることとして、すなわち、共通の責務にあたって―共に生きる生活、仕事、文化の確かな保証という目的にあたって―の奉仕として、理解されるべきである。力は、決して力それ自体のために求められるものではなく、常に、共同の目的に関連したものである。そして、このことは、実にとりわけ、教会共同体―イエス・キリストの御名において集まる共同体―に当てはまる。イエスは権威に勝利し、それに伴う権力に打ち克たれた。なぜなら、この方は、和解と愛を生きられたからである。なぜなら、この方には、そのために責任を負う用意、ご自身のその命をもって責任を担う用意があったからである。
３．力が、キリスト教会にとって、つねに、仕えることをもって果たされるのであれば、そのことは、組織構造上にも示されなければならない―どのように決定がなされるのか、たとえば誰が、どのやり方で、指導的責任を請け負うのか、力ある者たちが仕えることをやめたときに、それらの者たちを解任することはできるのか―。聖なるものは、秘術の内、神秘的に覆われたものの内に現れるものではなく、和解させられた生の内に、まことに神の責務を負うため、この意味で仕える用意のあるところに現れるものである。

最後に

４．わたしたちは、カトリック教会ではなく、わたしたち自身の教会を改革しなければならない。しかも、福音の力、その良き力についての理解が、再び輝きだすようなあり方で。神の御力がわたしたちの生を力強くする。この御力を、人は手中にすることはできず、人はただ、御力の仕え人としてのみあることができる。

アーメン。

＊〔 〕内は訳者の手になります。ドイツ語説教原稿は、フラウミュンスター教会ホームページ（http://www.fraumuenster.ch）「説教と礼拝 Predigt und Gottesdienst」の項でごらんいただけます。本訳文に関するご指摘、お問合せ等は、訳者（大石周平 ohishi_shuhey@hotmail.com)までおよせください。